ゲームみたいな第二の人生を貰ったぜ！

てんびん座

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゲームみたいな第二の人生を貰ったぜ！

【Ｎコード】
Ｎ３４０６Ｚ

【作者名】
てんびん座

【あらすじ】
気がつくと、俺はテンプレ通りの真っ白空間にいた。そしてやっぱり神だという人物が現れて、やっぱり転生させてくれるらしい。チート能力はもらえないらしいけど、まあ、楽しむとするか。

第零話（前書き）

他の作品がまだ終わっていないのに書いてしまいました。

第零話

「……どこだ、ここは？」

そこは白かった。視界の端から端まで全てが白く、果てがない。声を出しても反響すらしないことから、とても広い空間であることがわかる。

「俺はどうしてこんな所に……？たしか、近所のコンビニに行って、それから……」

「死んじまったんだなぁ、うん」

背後から聞こえた声に彼は振り返った。そこには白衣を纏った金髪の博士風な男がいた。ふちなし眼鏡をクイッと押し上げ、気まずそうに彼を見つめている。

「死んだ？俺が？」

「あぁ、そうだ。お前は不幸にも工事現場で起こった倒壊に巻き込まれ、全身をミンチにされて死んだ。証拠に写真見るか？」

「……いえ、結構です」

確かに、彼にはうっすらとだが家の近所に工事現場があった記憶があった。おそらく、そこでの事故のことだろう。

「お前、名前は思い出せるか？いや、前世の記憶は？」

「え、ああ。俺は……」

そこで口がピタリと止まった。自分の名前が全く思い出せなかったのだ。それだけではなく、自分の家族の顔も経歴も、自分の年齢すら思い出せない。所々が虫食いのように穴だらけになっていた。

「やっぱりか。わかってるとは思うが俺は神だ。お前は生前、二次創作が好きだったらしいから意味はわかるな？」

「まさか……」

「そうだ。実はな、その事故は本当は起こらないはずだったんだよ。二次創作でテンプレの『書類にコーヒー』のパターンだ。いや、本当にうっかりしていた。マジですまん」

その時、彼はネットで見た展開を思い出していた。チート能力やイケメン、果てにはＴＳなどやりたい放題の展開になるというものだ。

「え！じゃあ俺死んだのか！？」

全くもって寝耳に水であった。別に彼は自宅警備員でも、学校で孤独な存在だったわけでもない。未練だってまだある。

「マジで悪かったな。侘びとして好きな世界に転生してくれて構わねぇ。どこの世界が良い？」

「マジか」

「マジだ」

本当に全てテンプレ通りだった。

「それなら『魔法少女リリカルなのは』の世界にしてくれ」

彼がその世界を選んだのは単純、記憶に残ってるアニメがそれくらいしかなかったからだ。炸裂する砲撃、知覚すらできない高速移動、心躍る近接戦など、頭の中に鮮烈に残っている。

「……あ～、あそこか～」

神は遠い目をして呟いた。

「まぁ、わかった。ただし、転生ってのは本来かなりの例外（イレギュラー）なんだよ。だから良く見る二次創作みたいに他作品の能力を付加するのは無理だ」

昔ならいざ知らずな、と神は付け加えた。

「だが、お前にはできるだけ好条件な状態で転生させてやる。これが俺にできる最大限だ」

「……そうなのか、わかった。色々とありがとうな」

「おう、気にすんな。元々はこっちのミスだ。第二の人生、楽しんでこい」

神がそう言った瞬間、彼の足元に穴が開き彼は声を出す間もなく落ちていったのだった。

「いや～、今回はマジで冷や汗もんだったぜ」

被害者の彼が転生していった瞬間、近くの空間が光に包まれ、そこから簡素なパイプ椅子が現れた。神はそれにどっかりと座る。

「はぁ～、もし俺ＴＵＥＥＥＥが良いとか抜かす転生者だったら面倒なことになってた。転生できるだけで満足な馬鹿で助かったな」

実際、かなりの好条件で転生できるようには取り計らった。彼の第二の人生は刺激に満ちたものになるだろう。

「いや～、それにしても、書類にコーヒーかけたら本当に人が死ぬのかって実験だったが……。はぁ、これはもうやらねぇ方が良いな」

そう言って彼はベトベトになった一枚の紙を取り出した。その紙は水気を吸ってベチャベチャになり、文字の一つすら読むことができない。彼が名前を思い出せなかったのもこれが原因だ。

しかも、

「ったくアイツら、調子に乗ってかけまくりやがって」

そう、実はかけられたのはコーヒーだけではない。

メロンソーダ、サイダー、コーラ、ケチャップ、マヨネーズ、ウスターソース、タルタルソース、牛乳、豆乳、青汁、スポーツドリンク、ココア、紅茶、ウーロン茶、麦茶、ほうじ茶、オレンジジュース、アップルジュース、ぶどうジュース、マンゴージュース、バナナジュース、カル〇ス、ヤ〇ルト、灯油、ガソリン、泥水、砂糖水、食塩水、果てには人間の生き血などを大量に。

「部下が仕事を増やしてど～すんだよ」

その部下たちには、彼を最高に持て成すために同じ世界に転生している。ただの人間一人としてあの世界を盛り上げるためだ。
なぜ神がここまでするのかというと、他の神が好機とばかりにこれを材料にして反抗してくる可能性があったからだ。この神は他の神の中でもかなり嫌われているため、充分にあり得る話だった。ならば、そのことが露見しなければ良い。あの転生者にはせいぜい幸せな人生を送ってもらって、万が一にも他の神に文句を言うことがないようにしなければ。
どうせ神なんて自分の仕事で手一杯だろうから言われない限りはバレないだろうし。

「ま、せいぜい隠蔽に付き合ってくれや、転生者くんよ」

第零話（後書き）

勢いで書いてしまったので、更新速度が遅いです。
今回は前作や前々作の主人公たちとは全く関係のない一般人が主人公なので、外道は……ありません、たぶん、きっと、おそらく。
その予定です。たまには少年漫画みたいなのを書いてみたいなと思って始めました。
もう一作の方が中心なので、更新停止はありません。どうぞご安心を。

第一話

「アスカく～ん、起きてください～」

心地の良い声が、彼を眠りの底から引き上げようとしていた。しかし、その声はまるで子守唄のように彼の脳内に木霊し、彼をさらなる眠りの世界へと誘う。

「アスカく～ん、起きないと幼稚園のバスが来てしまいますよ～？」

美声が再び声を発し、さらにユサユサと彼を揺すって起床を促そうとしてきたが、それは逆効果だった。半覚醒だった彼の脳はどんどんと機能を停止していき、

「必殺のフライングボディプレス」

絶対零度の宣言とともに完全覚醒した。

「ごっふ！」

「抉りこむように、打つべし打つべし打つべし」

さらに声の人物は彼――――アスカ＝イクシオンの胴に跨り、レバーを執拗に攻撃してくる。ボクサーかお前は。

「起きろ、さもないとコロスゾ」

「げホッ、はいっ！起きました！！」

必殺の連続攻撃に、流石のアスカも目を覚ました。寝巻きの胸倉を掴まれた彼の目に涙が溢れているのは、寝起きだからではないだろう。

そして、彼を起こした張本人はコロリと態度を元に戻し、

「おはようございます～、アスカくん」

何事もなかったかのように手を放した。

彼、アスカ＝イクシオンは転生者である。両親は出張などで家を空けることが多いため、隣の家であるここ、北条家に居候しているのだった。そしてこのボクサーもどき――――北条（ほうじょう）　瑠奈（るな）はこの家の一人息子である。しかし、その容姿はとても男であるということを信じられるものではなく、実に少女らしかった。

まず、髪が長い。腰に届くほどはある。そしてその髪は銀髪で、顔は色白、瞳は蒼穹のように透き通った青色と、全く日本人らしくなかった。彼の曾祖母が北欧系らしいので、その影響らしい。

「ほらほら～、ボサッとしてないで朝ごはんにしましょう～。今日はアスカくんが好きな和食ですよ～」

そう言って瑠奈はルンルン♪と部屋から出て行こうとし、

「二度寝したらコブラツイストな？」

そう言い残していった。目が本気だった。

「……やれやれだな」

アスカは溜め息を吐き、幼稚園の制服に着替え始めた。時刻は七時、これから朝食を食べれば充分に間に合う時間だろう。
そして彼は壁に掛かっている鏡で軽く身だしなみを整えた。母親譲りの日本人風な黒髪黒目と、西欧系の父親譲りのそこそこ整った顔立ちが映る。

「黙っていればイケメン、か？」

自分がイケメンの部類に入るのかどうかを推察しながら、アスカは一階のリビングへと降りていった。
そこには、朝のニュースを見ながら二人分の朝食を用意している瑠奈がいた。彼の両親は朝早くに出勤してしまうため、自然と朝食はアスカと二人きりになるのである。

「それでは、いただきます～」

「いただきます」

そして、アスカは瑠奈がつくった朝食にありつくのだった。

†　†　†

「アスカくんって大人びていますよね～」

幼稚園に向かうバスの中、瑠奈が突然そんなことを言い出した。

「そうか？瑠奈の方が大人びてるだろ。料理できるし」

「そんなことないですよ～」

実際のところ、二人は周囲の中では大人びていた。
アスカは転生者である。生前は何歳だったのかは既に記憶にないが、それでも彼は幼稚園児と比べれば充分に大人だ。それと同等の瑠奈の方が、アスカには不思議であった。

「黙っていれば可愛い幼馴染で通るんだけどな」

「私は黙っていなくても可愛いと評判ですよ～。もう女の子みたいな顔だとからかわれるのには慣れました～」

アスカが瑠奈と出合ったのには、それが大きく関係している。
去年の冬、彼は同じ幼稚園で虐められている瑠奈を見つけたのだ。
当初は関わる気など微塵もなく、「子供って残酷だな～」くらいにしか思っていなかった。しかし、ある日を境に虐めはパタリとなくなった。その理由を、アスカは目撃してしまったのだ。

「いやいや、その報復に年上の奴までボコボコにするような奴は可愛いとは言えないだろ」

そう、ボコボコにしたのだ。
二度と逆らう気が起きないよう、サンドバックのように年上の園児を殴り、仲間を引き連れて戻ってくれば仲間ごとサンドバックにした。それを続けた結果、瑠奈は幼稚園のガキ大将を超えた覇王となっている。しかも、先生には露見しないように細工すら行っていたのだ。

「相手を選ばないから悪いのですよ～。ほら、人は見かけによらないと言いますし～」

「お前が言うと説得力あるな」

事実、園児の中で瑠奈を軽んじている者はもういない。瑠奈が万引きしろと言えば、おそらく園児は泣く泣く万引きするだろう。それほどに瑠奈の影響力は絶大だった。

†　†　†

幼稚園の卒園は、アスカが思っていた以上に早かった。瑠奈と出会って数年、ここが『魔法少女リリカルなのは』の世界であることを忘れかけてしまうほどに。実際問題、アスカは転生の際に記憶のほとんどが塗りつぶされていたため、原作の知識は殆どが抜け落ちていた。

「あ～、なんか幼稚園時代の内にやっとかなきゃいけなかったことがあった気がする」

「急にどうしたのですか～？」

「いやさ、誰かに会わないといけなかった気がするんだよな。誰だろう？」

「……そうですか～」

その言葉をアスカが呟いたのは、二人が私立聖翔大付属小学校の入学する日だった。

いつものように殺人技（今日はジャイアントスイングだった）で目を覚ましたアスカは、別に小学校に入学するのが初めてという訳でもないため、たいして緊張はしていなかった。ただ、この学校の名前を聞いた瞬間、何か引っかかりのようなものを思い出したのだ。

「まあ、別に良いか」

「ですね～」

そして同じクラスとなった二人は教室に移動し、それぞれの席に着いた。並び方は五十音順だったため、二人の席の間には若干の開きがあった。チラリと瑠奈の方を見ると、こちらの視線に気づき、軽く手を振ってくる。

その時、担任教師と思われる女性が入室してきた。そして入学を祝う言葉を述べた後、生徒同士での自己紹介をすることになった。アスカは苗字の関係で出席番号は一番。よって、最初に自己紹介をすることになった。

「あ～、アスカ＝イクシオンです。名前が外人みたいなのは父親が外国人だからで、向こうの言葉は話せません。趣味はゲームで好きな食べ物は和食全般です。よろしくお願いします」

そして一礼。教室に拍手が響き渡った。

その後はアスカの自己紹介を参考にしたような自己紹介が続き、そして、

「はい、良くできました。それでは次の人」

「は、はい！」

その声は、どこかで聞いたことがある気がして、

「た、高町なのはです！よ、よろしくお願いします！」

その栗色のツインテールと鳶色の瞳はどこかで見たことがある気がして、

「高町、なのは？」

思わずアスカはその名前を呟いた。

その後にあった瑠奈の自己紹介は耳に入らなかった。

第二話

『それでは、次のニュースです。全国で頻発している児童誘拐事件の――』

「最近は物騒ですね～」

茶碗を片手に、瑠奈は呟いた。しかしアスカはそれに応えず、ジッと考え続けていた。

同じクラスの高町なのはについてである。

入学してからの彼女の印象は、とても大人しいというものである。特定の誰かと仲が良いという様子もなく、やや人見知りといった感じのする、どこのクラスにも一人はいそうな、極めて普通の少女だった。唯一目立ったことがあるとすれば、最近になってクラスの女子二人と仲良くなり始めたことくらいだろうか？

そんな彼女に、なぜ自分は目を引かれたのだろうか？

「アスカく～ん？大丈夫ですか～？」

「――ッ、ああ、悪い、何だっけ？」

「しっかりしてください～。ここのところ、誘拐事件が多いので気をつけてください～」

「応、わかった。気をつける」

「……大丈夫ですかね～？」

そう言いながら、瑠奈は食器を片付けに流し台へと歩いていった。そんなことよりも、アスカにとっては『高町なのは』の方が重要であった。

アスカが卒園した幼稚園に、あんな少女はいなかった。かといって、それ以前に会ったという記憶もない。会ったこともないのに気になる理由となると、アスカが思いつくことはそう多くなかった。

「これは、原作に関わることなのか……」

『原作』、それはアスカが転生したこの世界で起こる未来と言っても良い。この世界がどういった世界だったかは、その詳細までは覚えてはいなかったが、彼女の周囲で事件が起こることは間違いなかった。それも、アスカの僅かな記憶によれば、それはそう遠くない。

「俺は、どうするべきだ」

わざわざ転生までしたのだ、物語には当然関わりたい。神が言うには、自分はかなり恵まれた状態で転生しているらしいし、魔力だってあるのだろう。ならば、活躍できる可能性は充分にある。

「よし、とりあえずは原作に関わる高町と仲良くなっておこう。そうすれば便利だろうし」

それに彼女の容姿はなかなかに好みだ。物語でもヒロイン級だったのだろう。それならば、彼女と仲を良くしておいて悪いことなど一つもない。運が良ければ、前世で夢見たハーレムの実現だってできるかもしれない。

当面の方針が決まったアスカは、鼻歌を歌いながら夕食を続けた。心なしか、普段の夕飯よりも数倍美味しかった気がした。実際、それはアスカの気のせいなのだが、それはそれで良かったのかもしれない。

これが北条家で食べる最後の食事だったのだから。

†　†　†

「瑠奈、これからコンビニ行くけど、何か買ってくる物あるか～？」

「いいえ、ありません～。というか、もう暗いですから明日にした方が～」

「大丈夫大丈夫」

手をヒラヒラと振りながらアスカは家を出た。まだ春先なため、夜は少し肌寒い。そんな中、アスカは切れた炭酸飲料を買うために一人コンビニへと足を向けていた。日が沈んだからか周囲には人の姿が見当たらず、住宅街はシンと静まりかえっている。

「こりゃ、絶好の誘拐日和だろ」

一人冗談を呟きながら、アスカは黙々と歩を進めた。
この辺りでは誘拐事件は起こっていない。事件は全国各地で起こっているが、治安の良い海鳴だからこそ、まだ事件は起こっていなかった。そして、これからも起こるとは思っていなかったのだ。

だからこそ、アスカも油断したのかもしれなかった。

突然の衝撃。

「――――があッ！？」

どこかに凄まじい威力の打撃を叩き込まれ、アスカはコンクリートの地面に倒れ伏した。

意識が混濁し、なぜ自分が地面に倒れているのかがわからない。周囲で誰かが何かを話しているのが聞こえたが、エコーがかかっているかのようにはっきりと聞こえない。

「……お……だ…にも見ら…て……い…？」

「だい……ぶだ、けっ…いを張…ている」

コイツらは何を言っているんだ？何がどうなっている？そもそも、コイツらは誰だ？

様々なことが頭に浮かび、そして消えてゆく。そして段々と視界が暗くなっていき――――

その日、アスカが家に戻ってくることはなかった。

†　†　†

アスカが意識を失った時、彼は近くの屋根の上からその一部始終を

観察していた。
コンビニへと向かうアスカに、背後から二人の男が迫って首筋に当て身を叩き込んだのだ。相当な威力だったらしく、アスカは一撃で昏倒してしまった。

「あ～あ、だから気をつけてって言ったのに～」

そう、誰にともなく呟いたその言葉に、

『どうなさりますか？保護されるのならば今しかありませんが』

彼がいつも首から提(さ)げている、白いペンダントが応えた。

「いえいえ～、これは私の管轄外です～」

そう言ってアスカが黒塗りの乗用車に運び込まれる様子を、瑠奈――――いや、ルナは見つめていた。彼がその気になれば、誘拐はおろか襲撃すら未然に防げたはずなのにである。

それに、とルナは付け加えた。

「これは彼の試練です～。教授が仰っていた『人生の好条件』というものは、何も家柄や才能のことだけではありません～」

『と、言いますと？』

「人生山あり谷あり、波乱万丈、つまりは『主人公』のような人生のことなのですよ～」

人間、上手くいき過ぎれば必ず飽きが来るものだ。教授はそれを回

避するために、原作に関わらなくとも事件が続くように幸運のパラメーターを設定した。その結果が『これ』だ。

「教授曰く、『文字通り必死に生きてこそ、人生のありがたみがわかる』だそうです～。つまり、これは彼が死ぬ気で頑張れば何とかなる試練なのですよ～」

『そういうものなのですか』

「です～」

少なくとも、ルナはそう聞いている。アスカが人生を諦め、ここで死ぬ可能性もある。その時は、心が折れる前に改めて自分たちの内の誰かが救いの手を差し伸べれば良い。そうすれば彼は再び立ち上がり、鮮烈で充実した人生を歩んでゆけるだろう。

「さてと、それじゃあ私たちは帰りますか～。見たい番組がもうすぐ始まってしまいます～」

そう言ってルナ――――いや、瑠奈は無人の路地に降り立ち、帰路に就いたのだった。

その場に漂う、誘拐犯二人が張った人払いの結界の魔力の残滓を残して。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3406z/

ゲームみたいな第二の人生を貰ったぜ！

2011年12月18日02時55分発行